

私は JR 西日本の一年更新の契約社員になりました。障害者雇用では正規雇用をしていないことが多いのも問題と思います。そして、今回、私が裁判に訴えている事件に巻き込まれました。上司から執拗なセクハラがあり、会社に告発しました。その事情聴取の席で、会社のセクハラ相談室の担当者は笑いながら「串カツとあなたの身体はどっちが高い？」などと発言しました。厚生労働省のセクハラ防止マニュアルには、被害を訴えた人のプライバシーを守り人格を尊重すべきとありますが、この言葉自体、セクハラ発言だと思います。今は最高裁に上告しています。一審は完全敗訴、二審は大阪高裁にて一部勝訴、相手の責任を認めるものでした。

私の経験してきたことは、障害があるという時点でフェアな目では見てもらえず、さらに女性であるという、立たされている位置の低さが、大きな原因だと思います。みなさんに、こういうことを含めて、差別禁止法を議論し、議会で審議していただきたいと思います。

## 調査報告書を読んで

### 外国人女性の複合差別に取り組んできて

やまぎし もとこ  
カラカサン～移住女性のためのエンパワメントセンター 山岸 素子

昨年、ちょうど、この複合差別実態調査に取り組んでおられるまっただ中の DPI 女性障害者ネットワークのメンバーの方々の会議に参加させていただく機会があった。私たちカラカサンの、フィリピン女性たちによるフェミニスト参加型アクションリサーチの経験を、共有するためだった。この時に、私と一緒に参加したフィリピン女性のスタッフが、メンバーの皆さんとの間に感じた、何とも言いがたい共感と連帯の感情が、今回、報告書を読んだ私の心の中に再度よみがえり、胸が熱くなった。

そのときに会ったメンバーとの会話のやりとりで感じたこと、そしてこの報告書の中にある、障害をもつ多くの女性たちの訴えから感じたこと。それは、日本に移住してきた外国人女性も障害のある日本人女性も、女性であることと外国人や障害をもっていることという複合的な差別の中で、日々、もがき苦しんでいるという重い現実…。外国人女性と障害をもつ女性の経験に、どれだけ多くの共通点が見いだせることか。たとえば、性被害や DV などの暴力の被害に遭いやすいこと、就労や経済的な自立に多くの困難がともなうこと、家族・社会のなかでいつも差別や偏見、無理解にさらされていること…等々。

その一方で、私が会った DPI 女性障害者ネットワークのメンバーやこの報告書の中の女性たちは、大きな「希望」を、外国人女性や私に与えてくれた。外国人女性と障害をもつ女性との間に感じた、もう一つの共通点。それは、時には無力感にうちひしがれながらも、集まって分かちあう過程の中で、「私たちの尊厳をふみにじらないで！人間として大切にしてください！」という声をあげ、希望をけっして失わないで訴え続けていこうとする彼女たちの、生に対する肯定的な姿勢である。

今後、外国人女性と障害をもつ女性との間の相互の交流が進み、お互いのエンパワメントの関係が構築されていくことを、心から願ってやまない。

---

「障害のある女性の生活の困難 複合差別実態調査」報告書は第二刷を頒布中。  
連絡先 dpiwomen@gmail.com 案内は DPI 女性障害者ネットワークのサイトをご参照下さい。  
<http://dpiwomennet.choumusubi.com/>